

原因（病原体）

馬インフルエンザウイルス（H3N8亜型またはH7N7亜型）
※ただし、H7N7亜型は世界中で40年以上報告されていない。

感受性動物

馬（人の発症例は報告されていない）

症状

飛沫感染により急速に伝播し、2～3日の潜伏期の後、39～41℃の発熱、激しい乾性の咳、水様性鼻汁等の呼吸器症状、元気消失、食欲不振などがみられる。通常は2～3週間で回復する。

発生状況

（1）国内

- 1971年～1972年に競走馬や乗用馬で流行。
- 2007年～2008年に33都道府県で2,512頭の発生届出（疑症を含む）。
- 2025年4月、熊本県と北海道の重種馬等で発生確認（5月8日時点で36頭が届出）。

（2）海外

世界的に流行（特に北米や欧州）

予防法

市販のワクチン（不活化ワクチン）が存在。

治療法

対症療法が中心。

対策

- ワクチン接種の励行。
- 発症馬の早期発見と診断。
- 本病が確認された場合は、発症馬の隔離、同居馬の移動自粛、感染馬が飼養される厩舎及び用いられた器具等の消毒を徹底。



出典：（国）農研機構動物衛生研究部門